

すみよし



2010年 イースター号 第180号

聖 句

“ まことの愛 ”

“ 私の掟は私が汝等を愛したごとく

汝等が互に愛し合う事である・・・”

ヨハネ福音書 15 章 12 節 ~ 17 節



"キリストと一緒に死んだら キリストと一緒に復活する"

アパレシドドニゼッチ・マシエル神父

もし、私たちがキリストと共に死んだのなら、キリストと共に生きることになる。

これから迎える復活の神秘は私たちの為の生きがいになる。もし、イエス様が復活しなかったら、私たちの信仰は空しい。

この四旬節にあたって考える時、

この時期子供の私は家族と一緒に教会に行ってミサに参加したり、十字架の道行きの祈りをしました。この時、教会の神父様は各家族に宿題を出して下さいました。私の家族には病人のお見舞いをしなさい、と言う事だった。そして私はお母さんと一緒にお見舞いに行き、その人の苦しさをある程度理解しました。十字架の道行きをすると、神父様は私たちに小さい十字架を下さり、私は一人で病気の人の所に行き、その十字架を渡しました。その時私は11才ぐらいだったと思います。時々病気の人からもメッセージがありました。「私はあの子供に大事な話がある」と... その話はその人だけでなく、大体皆同じ事を言ってくれた。それは、その十字架を貰った時、「キリストの受難を思い出し、私の苦しみをみんなの為に捧げた」と。

枝の主日は子供達は枝を2本貰います。一つは自分の家の為に、一つは病気の人の為に。その人は教会に来る事が出来ないけれど、四旬節の神秘を味わう事が出来た。断食の事に付いて子供はその義務が無いが、私自身は、嫌いなことをするようにした。それは、お母さんの待つ家に帰る事。何故なら、掃除を手伝わないといけないから... 私が忘れられない事は、12才の時の聖木曜日、洗足する子供に選ばれた。その子供達に神父様は大きなパンを一人一人に下さった。そのパンを私は貧しい家族に持って行き、その家族はとても喜び、私にとっても大きな喜びだった。

聖木曜日のミサが終わってから聖金曜日の午後まで教会は開いていて、皆ご聖体訪問をしていた。私は夜もずーっと祈りたかったけれど子供の私をお母さんは許してくれなかった。お母さんの話を聞いた神父さまが「子供に聞きましょう。彼に決めさせましょう」私はもっと残っていたかったので、そう答えたので、お母さんは泣きながら帰った。

聖金曜日には必ず行列があり、死んだキリスト様を担いで沢山の人が参加します。そして大人は裸足、子供は靴を履く様に神父様が命令しました。それでも、私は裸足で歩いたので、神父様に叱られました。しかし、「私はあなたの為では無く、キリストの為にしている」と答えてそのまま裸足で歩き

ました。

聖土曜日の徹夜祭が終ると、大きいパーティーが持ち寄りで開かれた。そして終わった時には片付ける人は無く、いつも神父様は困っていました。私は子供でしたが、必ず手伝って掃除をし、半分怒って待っていたお母さんと一緒に帰りました。

特に聖週間間に私たちは肉とミルクはとらない。化粧もしないようにお母さんに命じられていた。大人になってもこれは忘れる事が出来ない。復活の日は五時から行列が始まり、復活されたキリスト様をかつぎ、それが終わってからミサが始まります。ミサが終るとそれぞれの家で家族と一緒に食事をしたり、踊ったりして祝いました。そういう事を経験して私は少しずつ復活の神秘を味わう事ができるようになりました。

マシエル神父様はブラジルご出身で、現在神戸中央教会に居住され日本語の勉強をなさっています。



《目 次》

聖句	2
巻頭 アパレシッドドニゼッチ・マシエル神父	3
目次	5
四旬節黙想会 後藤 正史神父	6
入信記 HN	(8 ~ 9)
震災祈念ミサ・祈念ウォーク	9
新年会	13
成人式 SU	15
聖パウロ三木	16
社会活動炊き出し	17
中高生釜が崎夜回り	18
図書コーナーより	21
信徒動静・教会日誌	(22 ~ 23)
後記	22

題 字： 故 千葉健吉

表 紙 画： 十河 契太（教会学校）

太字は本ホームページ掲載の PDF ファイルのページ、カッコ付きは原本のページを表す

四旬節黙想会

3 月 21 日(日)

広島教区・幟町教会主任司祭 後藤正史神父様

今日は黙想会指導のために遠路広島からお越し頂いた後藤神父様叙階 20 年、赤波江神父様 21 年の記念日にあたり、印象深い日となりました。

ミサのなかで神父様は、今日の福音（ヨハネ 8 の 1 ~ 11）の「姦通した女」の話から、イエスが地面にかがみこんで、そこから目を上げてファリサイ派や律法学者、さらに罪を犯した女に話された姿、それこそが humility（謙遜）を示す姿であり、自分や人の持っている力をありのままの姿で受け入れ、神が良いものとして造られた私たち人間みんなとつながっていきたくと話されました。



1) 福音前線はどこに？

桜のつぼみもほころびはじめました。桜前線とか寒冷前線という言葉があります。昨夜、子供たちに「神父様の楽しいことは何？」と聞かれて、病者訪問の話をしました。私たちはご病人の所へ、ご聖体を持っていくのではなく、イエスさまのお供をして行くのです。

赦しの秘跡のときも同じ。苦しんでいる人、悩んでいる人の中にイエスさまはおられるのです。のどが渇いているときに差し出された 1 杯の水。快く泊めてくれた一夜の宿。みんな私にしてくれたことだと、イエスさまは言われます。

司祭としてその人々の中にイエスさまがおられると確信するときに大きな喜びを感じます。

マザーテレサは一日に 2 回ご聖体を受けると言われました。1 回はミサの時。もう 1 回は路上の病人を介抱する時です。福音前線はあなたのそばにあります。

2) 召命の原点

大阪で 8 年間暮らし、そのうちの 1 年間は釜が崎の近くのアパートに住み、「ふる里の家」やその 2 階にある「子供の家」に行っていました。その頃、釜が崎のおっちゃんに「クリスチャンの人は大勢くるけど、いつも助けてあげる、施してやるという高いところからの目線を感じる」と言われました。生まれたその日に洗礼を受けた私は、教会が好きで日曜日はいつも教会へ行ったものです。カトリック信者として、おっちゃんたちに話しかける言葉はあるのか？ キリストを知っているというけれど、自分の大切にしてきたものを相手に伝えられるのか？

私は自分の信仰が問われているような気がしました。釜が崎は私の 2 番目の故郷であり、

召命の原点です。

3) つながり

'95 年の大震災の時、人々は家を失い、ライフラインである電気、ガス、水道も止まりました。みんながホームレスの状態になって、ありのままの人間がさらけ出された時、本当に大切なものは人と人のつながりであることに気がついたのです。みんなの心が一つになってお互いの心が優しくなり、それがもう一度立ち上がる力となりました。

神戸が一番やさしくなった時といわれる所以でもあります。

近頃よく話題になるハードとソフト。教会の建物はハードで、みんなの信仰がソフトです。目に見える建物の中に、目に見えない信仰共同体としてみんなが神さまとつながっています。

神さまは苦しんでいる人、困っている人、淋しい人、悩んでいる人の中におられます。そんなきびしい状況にある人たちと同じ場所にいてつながっていることが、神さまとつながっていることなのです。

4) “みむね” と “じむね”

神の思いや望みであるみ旨。自分だけの思いや望みであるじ旨。私たちはこの二つの間を行ったり来たりしています。マリアもヨセフも「み旨のままに」と自分の身を神にゆだねました。信頼して預けきったところに新たな世界が生まれます。

私の好きな言葉に「あそび」があります。車のブレーキにも、アクセルにもあそびがあります。つまり、「ゆとり」・・・感情ばかりが先走りしてゆとりがないと、メッセージは伝わらず、相手との溝は深まるばかり。自分を攻撃してくる相手には一歩ひいてみる。時間的なゆとりを持つ。「そうでもないんじゃない？」とか「こんな所もあるよ」と別な視点でみる。その一言が相手を喜ばせ、お互いを生かす力となり、喜びにつながる力となるのです。

それこそが聖霊の力。神の命へとつながる力です。私たちはその招きに応えたい。み旨とじ旨を重ねる努力によって。

四旬節の間、おおげさな目標ではなく、目の前の小さなことをやってみよう！
子供なら、いままで素直に言えなかった「ハイ」という言葉を言うだけでもいい。
信者でない友達にも何か話しかけてみよう！ それが福音宣教。
神さまは私たちが大変なときにはきっと支えてくださいます。
神さまとのつながりの中で喜びを見つける信仰生活を送ることができますように。

編集部

昨年の夏休み、青春18切符で広島 山口 津和野3教会巡礼をした住吉教会の中高生等の子供たちは、広島教会であたたかく大歓迎してくださった後藤神父様に前日の土曜日の夕方に再会できて大喜び。神様のお話をいっぱいしていただいたあと、自分たちで準備した三種なべを囲んでたのしいひとときを過ごしました。



神父様のお話を
熱心に聞きまゝす



将来の夢は・・・

《震災 15 年教区新生の日祈念ミサと震災祈念ウォーク》

TK
SK

あらまし

1 月 17 日（日）に松浦司教様を迎え、住吉教会の震災 15 年祈念ミサが行われ、その中で「住吉小教区の祈り」を捧げました。この祈りを中央教会へ持参し、個人の祈りと共に中央教会祈念ミサで奉納しました。

震災15年 小教区の祈り

住吉教会では、二人の信者、一人の勉強中の方が、そして教会のまわりでも多くの方々が亡くなりました。家が全壊したり、火事で焼けてしまった人もいます。避難所や仮設住宅を経験した人もたくさんあります。教会の建物も壊れ、当時の生藤神父様のほこりだらけのスーツ姿を思い出します。沢山の他教会の方々も助けに来てくださいました。また私たちも地域のまわりの方々を訪問したり、ふれあい広場でお話したりしました。神様のお導きとみんなの努力で、今教会は新しいきれいな建物に生まれ変わりました。感謝いたします。15年経った今、震災で亡くなった多くの方々を追悼します。また震災で傷つき、今なお心身ともに苦しんでいる人たちが少しでも慰められますように。あの時みんなが自然に持ったまわりの人々への連帯感、キリストが教えてくださった“愛”そのものだったのではないのでしょうか。私たちがその体験を糧として、隣人への愛に生きていく事ができますように。

2010年1月17日

カトリック住吉教会

ミサ後、住吉教会を基点とする「震災 15 年祈念ウォーク」をスタートしました。これに先立ち午前 8 時半に、議長、副議長で住之江地区の公園の震災記念碑に祈りと花束を捧げてきました。

天候にも恵まれ、100 個用意した黄色いリボンが無くなり、30 個追加しましたがそれでも足りませんでした。予想以上の参加で総勢約 140 名でした。当日参加も多く住吉が約 100 名、諸教会から約 40 名でした。六甲、中央の皆様に加え、吹田、関目、千里NT、今市等々の信徒の皆様でした。それに松浦司教様、赤波江、片柳、マシア各神父様、援助修道会 Sr. でした。これは単なるイベントではなく、教会学校児童 16 名、中高生 10 名と震災を知らない世代の若者が震災祈念ウォークに参加したことは非常に意義あることだと思いました。中央では、受付、侍者、朗読、炊出しと各自役割をこなして頂き、住吉共同体が一つになって動き、祈った震災祈念のミサとウォークでした。皆さんに感謝します。

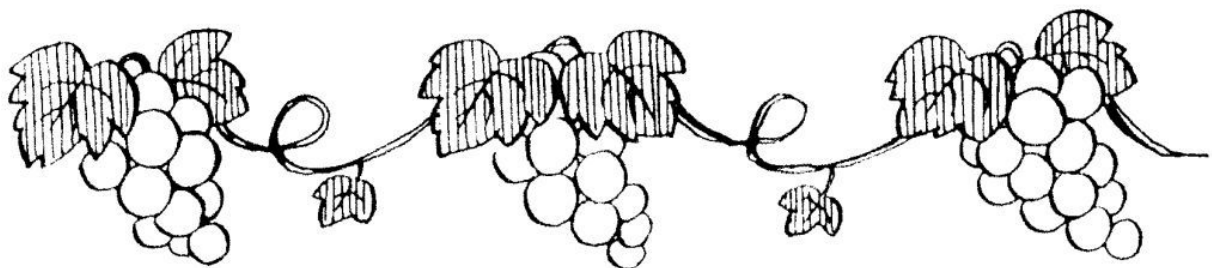
巡礼ウォークの準備と実施

昨年暮れ、大阪教区から、阪神淡路大震災 15 周年目に当たる 1 月 17 日、たかとり教会と住吉教会の 2 拠点から神戸中央教会に向けて震災巡礼ウォークを企画したいとの連絡を受けて住吉教会からの実行計画の検討に入りました。

コースの選定は、国道 2 号線、山手幹線、旧西国街道の中から、途中の電車の便、歩いて単調でない等の理由から旧西国街道を選びました。昔、26 聖人のたどった道でもあります。途中のトイレがあまりないため、阪神電車にお願いして駅のトイレを使わせていただけるように手配しました。救護班として谷尻先生と谷口智子さんに一緒に歩いていただきました。地図付きのコース案内を作り配布するとともに、ホームページに掲載して他教会を含めて参加される方の便宜を図りました。

1 月 17 日、主日ミサを終え松浦司教様と記念撮影をしたあと、教会を出発してすぐ近くの住吉宮町公園にある、震災慰霊碑をまず訪れて花束を捧げて祈りました。この日は寒さも一段落、沿道の景色を見ながら歩くことが出来ました。昔の街道をたどって、約 1 時間歩いたところの大石川公園で休憩し軽い昼食をとりました。休憩後、さらに西に向かって岩屋、春日野道、三宮と歩きました。中高生は途中コースの要所要所で止まって皆を案内し、急いでまた列の前に戻ってくれました。教会学校のグループは大石から分かれて電車ですぐ三宮に出て東遊園地の震災モニュメントを訪れました。

住吉教会を出発してから 2 時間余り、最後の北野坂を上って神戸中央教会に着きました。100 人以上の行列で先頭が到着してから最後尾がゴールするまで 20 分ほどで松浦司教様は先頭近くを歩かれましたが、年配者から若者まで予想以上にまとまって歩くことが出来ました。大した事故もなくこのイベントを実施できたのは参加した皆さんのご協力の賜物です。





巡礼に出発



大石川公園で休憩



軽食をとって
元気回復



神戸中央教会にて
震災祈念ミサ



巡礼の皆様にお接待。温かい芋汁で
おもてなし



身も心も温かくなりました



新年会

1月24日(日)

毎年恒例の新年会がオマリ神父様・シリロ神父様・赤波江神父様・ペンケレッシュ神父様・園長先生やシスター、そして神戸中央教会からもお客様方をお迎えして一階集会室で賑やかに始まりました。今年は出席者も多く、木村ソムリエ特製の出汁による鳥なべ・魚なべにいろいろなお酒の食事。

松田明美さんの「黒田節」の踊り・南京玉すだれや赤波江神父様や子供たちの二人羽織、ゲーム等で楽しみました。谷尻先生のご挨拶の「皆で準備し皆で片付け」もいつもどおりに行われ、なごやかに終了しました。

来年も大勢の参加をお待ちしています。



子供たちも楽しそう



温まりますね



いつもお見事です



《成人式》

1月10日

～新成人おめでとうございます～

フランシスコ・ザビエル SUさん



「成人式のお祝いをありがとうございます。」

SU

新成人になったSUです。今回は僕のような青二才に発言の機会を与えていただき、ありがとうございます。

さて、法的・物質的に僕は大人という肩書きを手に入れました。しかし、精神的にはまだまだ子供であり、未熟さを痛感せずにはいられません。しかし、それは大変喜ばしいことでもあります。大人に近づけば近づくほど、童心は失われていくからです。ですから僕は、大人のような子供であり、子供のような大人になりたいと願っています。捨ててからそれを惜しんだり、手に入れたそれに失望することは誰もが通る道ですが、その打破に挑戦するのが若者の使命であり可能性です。おそらく、これは教会という範疇だけではなく、世の理全てに当てはまることではないでしょうか。

[目次](#)

日本二十六聖殉教者への祈り

聖パウロ三木と同志殉教者よ、あなたがたは京都から長崎までの十字架の道を歩み、キリストのために命を捧げました。

私たちが、あなたがたにならい、勇気を持って信仰のあかしをたてることができるよう導いて下さい。私たちがどんな試みにあっても、終わりまで耐え忍ぶことが出来るように力づけて下さい。

私たちがキリストの栄えを求め、救いのために働くことが出来るように取り次いでください。
アーメン



2010年
2月7日
カトリック住吉教会

《炊き出し》

2月6日 (土)

社会活動チーム

今年一番の寒い日でした。(強風でテントも撤去)

炊き出し、ご協力ありがとうございました。

鈴蘭台教会からの小・中・高校生ら7人(堅信の勉強のひとつとして参加)とリーダー、社会活動の方々20人と一緒にしました。

豚肉を入れてくださ~い。



豚肉をどうぞ。
温まってくださいね。

[目次](#)

《こどもよまわり》

2 月 13 日

中高生会

釜ヶ崎の「こどもの里」が行っている「こどもよまわり」に住吉教会からも 7 名の中高生が参加いたしました。

「こどもの里」・・・カトリック大阪大司教区が運営している学童保育所

「こどもよまわり」とは

1983 年に、横浜・山下公園で路上生活者が少年らに襲撃され死亡した事件をきっかけに、こどもの里館長の荘保共子さんのよびかけで、差別や偏見を改善するために、1986 年から始まりました。厳冬期の毎週土曜日に行われています。

一時間半の勉強会のあと、何グループかに分かれ（今回は釜ヶ崎北・釜ヶ崎南・天王寺・日本橋・なんばの 5 コース）、野宿者の方に声をかけ、おにぎりやお味噌汁・毛布などを配ります。



お勉強の時間です。皆、熱心に聴いています。

参加した中高生達を書いた感想文です。

「こどもよまわりだより」(2010・2・10 号)にも記載されています。

S(中一)

今日、僕は初めて夜回りに参加しました。まず思ったことは、ホームレスのおじさんたちも子供の時は自分と同じように学校に通っていたことを聞いたことです。そういう人達をゴミ扱いするのはおかしいと思いました。

また、おじさん達は意外と気軽に話しかけてくれ、今までのイメージが変わりました。こういう間違ったイメージを減らすことが大切だと思いました。

[目次](#)

K (中一)

僕は今回釜ヶ崎に行って、夜回りをしました。僕ははじめ路上生活者に対しては、危険な人達、仕事をしていない、というイメージがありました。しかし路上生活者がどんな人達が教えてもらおうとびっくりしました。

仕事をしたいのにももらえない、中学生くらいの若者に殺されたりする、そういうことを知ると、僕は腹がたちました。

どんなに自分がつらくてもそのストレスを、抵抗できない人をサンドバックのように殴ったり蹴ったりすることで解消させるのはおかしいと思う。

実際に夜回りに行くともみないいい人で、働きたいけれど、どこにも仕事がない、と言っていた。こんな人達を助けることはすごく大切だと僕は思った。

M (高一)

今回、初めてこの夜回りに参加するまで、ホームレスの人達へはあまりよい印象を持っていませんでした。しかし、この夜回りに参加してみてホームレスの人達を話してみると、僕の親戚にいてもおかしくはないような気さくな人達ばかりでした。それなのに若者におそわれたり、住む場所を奪われたりする現実には悲しくなりました。

道中で、ホームレスの人達は入ってこられないようにフェンスで囲った場所が何ヶ所もありましたが、なぜフェンスを設置するのにかけたお金をホームレスの人達のために使えないのでしょうか。フェンスを設置するのは、その土地の人にとっては安易で、即効性のある対策かもしれませんが、野宿を強いられる人が発生するという根本的な問題は何も解決しない、というより、さらにひどくなってしまうでしょう……そんなことを考えてしまいました。

Y (高一)

今日参加した夜回りで、改めて野宿者の方のつらさや苦しさが分かった気がします。地元神戸では、2時間という限られた時間の中で夜回りをするので、あまりゆっくりと野宿者の方と接する機会はずくなかったです。けれど今回の夜回りは初めての場所を夜回りするという事で緊張感や心配はありましたが、意外と野宿者の方々も気さくに話してくださって、ゆっくりとお話することができました。また、いろんな野宿者の方の声も聞けてよかったです。

夜回りは何か感じるものがあります。特に今回は感じる事がここに書ききれないくらい多かったです。また、初めて会った人との交流や人間のあり方を考えさせられます。

この夜回りにもっとたくさんの方が参加すべきだと感じました。

リーダー

初めて、教会の中高生七名と参加させていただきました。

私は天王寺コースに入らせていただきました。お墓やお寺では、あまり人がおられず、また時間も遅いせいか・・寝ていらっしゃる方が多く、起こしてまでお声をかけていいのか迷ってしまいました。起こしてしまった方も、嫌な顔もなさらずお話してくださり、最後には丁寧に「ありがとう」と言って下さり、本当に心が暖かくなりました。おじさん達の方が、人に対して優しく、暖かい心を持っていらっしゃるのだと思いました。もっとゆっくりお話を聴けるとよかったと反省しています。

小さな子供達の方が、声かけもお世話も上手で、感心しました。機会があればまた参加させていただきたいと思いました。一緒にまわらせていただいた方々ともお話ができ、感謝しています。

あいらん「こども夜まわり」24年

吹き飛ばす
幼い瞳

偏見



同上生活者の問題について学ぶ子どもたち
＝こどもの里で2月、森田樹彰

店街のアーケードで寝ていた男性に起こり、おみそ汁を手渡し、話しかける
さん(中央)ら。大阪市西成区で2月27日夜、森田樹彰



同じ日に「こどもよまわり」に参加した
毎日新聞社の記者の方が書かれた記事です。
3月17日毎日新聞 朝刊

[目次](#)

図書コーナーより

「カルカッタ日記」 マザー・テレサに出会って

片柳弘史著
ドン・ボスコ社発行

あることがきっかけで、22 歳のときに洗礼を受けた著者は信仰の実践のためにマザー・テレサに会う事を思いつきインドへ旅立ちます。「死を待つ人の家」でボランティア生活を送る中、さまざまな出来事や体験、マザー・テレサとの出会い、その魅力などしるされたこの日記はとても興味深く読み進むことができます。

「愛と励ましの言葉 366 日」

渡辺和子著
PHP 文庫

著者の多くの作品の中から短いフレーズを一年の日々に割り振って書かれています。例えば・・・

「4月23日 神の愛というものは人間を不幸、災難、苦しみから遠ざけることにあるのではなくそれらの試練に耐える力を添えてくださることにあります。」
“愛をこめて生きる”より

《 後記 》

六甲教会の片柳神父様による「カルカット日記」を読ませて頂きました。
その中でマザー・テレサは折にふれシスターたちによくお話をされるとの事ですが、
とても印象に残った言葉があります。

「あなた達はいつも喜んでいなさい。喜びにあふれた人は太陽のようなものです。あ
なた達に出会う人々が、立ち去る時にはあなた達と出会う前よりももっと喜びにあふ
れて立ち去ることが出来るようになさい。」

そう、私達の行くところ、いつも笑顔と喜びがあるといいなと改めて思いました。

(MM)

復活祭おめでとうございます。

このイースター号の記事に掲載されている教会の行事に参加して、またそれ以外の
数々の出来事を通して感じることは、個人の力では何も出来ないけれど神様が背中を
押してくださる共同体の力の素晴らしさです。

もうすぐ春、桜の句を見つけました。

人はみな なにかにはげみ 初桜 (深見 けん二)

(MH)

神様はこども達に、種々のタレントを豊かに与えて下さいます。今年の「すみよし」の表紙は教
会学校に描いていただきます。力作をご期待下さい。

「すみよし」第180号

発行日： 2010.4.3

発行責任者： 赤波江豊神父

編集： 広報チーム

発行所： 神戸市東灘区住吉宮町
2-18-23

カトリック住吉教会

TEL： 078-851-2756

FAX： 078-842-3380

<http://www.sumiyoshi.catholic.ne.jp>

製版・印刷： 信徒有志

